

タイトル…志願兵の行方

作者 津島次温

登場人物

田中秋雄…父（昭和20年45歳、昭和34年59歳）

田中喜美子…母（昭和20年39歳、昭和34年53歳）

田中優（まさる）…息子

（昭和20年16歳、昭和34年30歳）

田中直子…息子の妻（昭和34年27歳）

サト…（昭和20年40歳、昭和34年54歳）

村長夫人…（昭和20年48歳）

村の女

看護婦

ナレーション

M 軍歌

村長夫人「(遠くから) サトちゃん！」

サト「……ええ？」

村長夫人「(近づいてきて) サトちゃん、どうしたん、ぼんやりして」

サト「村長さんの奥さん。いえ、別にどうもしてへんけど」

村長夫人「サトちゃん、清ちゃんの出征、もうすぐやな」

サト「はい」

村長夫人「えらいなあ。まだまだ子供やと思うてたのに。

自分から志願するなんてホンマ立派やわ。こんな小さ

い村から志願兵が出てくれるなんて鼻が高いて、主人

も言うてはる。サトちゃんも、ええ子を持ったなあ」

サト「有り難うございます」

村長夫人「清ちゃんやったら、お国のためにしっかりと働いてくれるわ」

サト「……ええ」

村長夫人「出征の日は、みんなで盛大に送り出してあげ

よな」

サト「はい」

村長夫人「いやあ、ホンマに立派や。……あ、」

喜美子「……こんにちは、奥さん」

村長夫人「あんたか」

喜美子「あの……こんにちは、サッチャン」

サト「何の用なん」

村長夫人「サトちゃん、こんな人、放つといたらエエ。

ほら、行くで」

喜美子「サッチャン、清君のために千人針、集めてるん

やてね。あの、私も一針、縫わせてもろても」

村長夫人「あんた！何をヌケヌケとそんなことを」

喜美子「いえ、私も清君のことを」

村長夫人「あんたにそんなことされたらサトちゃんは迷

惑や！」

喜美子「迷惑やなんて」

村長夫人「清ちゃんのための大事な千人針やで。非国民

の針で汚さんという！」

喜美子「……非国民」

村長夫人「そうや！あんたの旦那は」

サト「もうええ！」

沈黙

村長夫人「サトちゃん」

サト「奥さん、もうええ。行きましょ」

M 軍歌 FO

SE 町の雑踏

SE 勝手口のドアを開き、中に入る。

ドアを閉める。

廊下を歩く（階段を上る）

食卓の入り口の引き戸を開く。

N 「家に帰り着き、いつものように上着をダンスに片づける」

SE 時計の音。

N 「ヤカンに水を注ぎ、それをコンロにかける。急須に茶葉を二すくい落とすと、食卓の椅子に腰かけてお湯が沸くのを待つ。蛍光灯の明かりの下、部屋の中には重い静寂が澱む」

S E 時計の針の音

N 「喜美子はその静寂をぼんやりと眺め、溜息をついた。思えばこの家に引っ越してから、喜美子はずっと沈黙の底で暮らしてきた。なぜ、そうなったのか。昭和二十年。終戦の年の春。あの日、喜美子の夫、秋雄がしたことを誰もが責めた。恥ずかしいことだと罵った。浴びせ続けられる非難と軽蔑の目に耐えきれず、喜美子たちは京北の村から逃げ出して、京都の町に移り住んだ。しかし、何も解決することはなかった。秋雄のことを誰よりも強く非難していたのは、息子の優だったからだ。優は京都へ引っ越したその翌年、高等学校を卒業すると同時に家を出て行った。それから十二年。喜美子と秋雄は、晴れることのない暗い感情に囚われて、今日まで生きてきた」

S E 電話のベル

喜美子「はい、田中です」

直子「……もしもし」

喜美子「はい？」

直子「あの……優さんのお母様でいらっしやいますよね」

喜美子「優？」

直子「突然お電話を差し上げて申し訳ありません。私、

優さんと一緒に暮らしています」

喜美子「優と一緒に？あなた」

直子「はい。二年前、優さんと結婚して、今、二人で暮らしています」

喜美子「まあ」

直子「御挨拶が遅くなって、本当に申し訳ありませんでした。お父様とお母様に会わせてほしいって、優さんにはずっとお願いしていたんです。でも、優さん、どうしても、うんと言ってくれなくて、ずっと連絡させてもらえなかったんです」

喜美子「そうやったの。あの、あなた、お名前は」

直子「直子です」

喜美子「直子さん、優は元気になっているの？」

直子「ええ、とても」

喜美子「今、どこで暮らしてるの？」

直子「伏見にいます」

喜美子「優は？ 今、となりに居るの？」

直子「いえ、今は私一人で電話しています。優さんがそちらに連絡をさせてくれないので、優さんの手帳に書いてあったそちらの電話番号を黙って控えたんです」

喜美子「そう」

直子「あの、私、やっぱり良くないと思って。お父様と

お母様にちゃんと御挨拶しないといけないと思って。

本当に遅くなってしまつて、申し訳ありません。できれば一度お会いしたいんです」

喜美子「でも、優は私たちに会いたくないんでしょう」

直子「私一人で御挨拶に伺います。いえ、二人です」

喜美子「二人つて」

直子「半年前に、子供を産みました」

喜美子「子供」

直子「女の子です。お母様やお父様にも見ていただきました

いんです」

喜美子「優に、子供ができたの？」

直子「お母様、そちらへお伺いしてもよろしいですか？」

喜美子「……ええ、是非お会いしましょう」

直子「有り難うございます」

喜美子「でも、主人は会えません」

直子「え？」

喜美子「入院してるの」

直子「入院、それは」

喜美子「主人は、がんなんです」

N「秋雄ががんで入院したのは、半年ほど前の事だ。秋雄は医者である。自宅の一階に小さな診療所を開いていた。患者にはタバコは控えるよう注意をしているのに、自分の健康には全く気を配らない。秋雄のタバコの量は、年と共に増えていた。レントゲン写真で自分の胸に黒い影を見つけたとき、秋雄は、そらあそうやなど、まるで他人事のようにつぶやいた。つらいのか、諦めなのか、表情の乏しい秋雄の感情を、喜美子は読み取ることができなかった。昔はこんな人ではなかつ



た。うれしい時は声をあげて笑い、悲しい時は人目を気にせず泣く。そんな人だったのに。喜美子は思った。秋雄はあの日以来変わったと。いや、秋雄だけではない。優も、そして喜美子自身も、田中家の家族はみんな、感情の多くを失った。昭和二十年の、あの日以来」

SE 木戸を激しく叩く

村長夫人「キミちゃん！キミちゃん！」

喜美子「はい。奥さん、どうしはりました」

秋雄「……ううっ」

喜美子「え……秋雄さん！」

優「母さん、どないしたんや……え、父さん！」

村長夫人「先生を返すさかい。あとはあんたが面倒見て」

優「父さん、何が有ったんや」

喜美子「秋雄さん。顔が傷だらけや。なんでこんな」

村長夫人「あんたら知らんの？先生が何したんか」

喜美子「いえ」

村長夫人「この人はなあ、優ちゃんの志願を取り消したんや」

喜美子「え？」

優「志願を」

村長夫人「そうや。せつかく体格検査に合格して、次は記述試験やったんやろ。せやのに、わざわざ軍の事務所まで行って、息子の志願は取り消させてくださいて、断ったんや。今、兵隊さんが家まで先生を連れてきはった。主人はあきれてしもうて、えらい怒ってるわ」

優「父さん、嘘やろ」

喜美子「秋雄さん」

秋雄「ううっ……喜美子……、やっぱり、アカン。僕は、優を戦地には行かせたない」

村長夫人「先生、さっき、ウチの主人から言われたことをもう忘れたんですか。今は一億総動員で働かなあかるときなんですよ」

秋雄「赤紙が来たんやったら、まだ諦めがつかます。せやけど、志願なんて。志願してまで、戦争に行くことはないんです」

村長夫人「せやったら、なんで志願を許さはったんですか。志願しておいて取り消したりしたら、優ちゃんがどんな目に会うか、考えへんかったんですか。それに、

志願したんは優ちゃんだけやないんですよ。自分の子供だけは戦地に行かせへんって。そんなこと言うて恥ずかし無いんですか」

秋雄「それでも、優を行かせたくはなかったんです。奥さん、分かりませんか。もう日本は無理なんです。日本はきつと負ける」

村長夫人「なんてこと言うんですか！自分の子供だけ助けようとして、おまけに日本が負けるやなんて！先生がそんな人やとは思てなかった！」

喜美子「奥さん、待ってください」

村長夫人「もう、あんたのことを先生なんて呼ばへん。

主人の言う通りや。あんたは、非国民や！」

喜美子「奥さん、ちよつと待って」

秋雄「喜美子、もうええ」

喜美子「お父さん」

優「父さん、ホンマか。ホンマに僕の志願を取り消したんか？」

秋雄「優……記述試験は、もう行かんでええ」

優「なんでそんなことしたんや」

秋雄「お前は、戦争には行ったらアカン」

優 「僕は、お国のために働きたかったんや！兵隊になるのが夢やったんや！せやのに」

秋雄 「(痛みが走る) ううっ」

優 「……父さんは、父さんはアホや！」

喜美子 「優！」

N 「体格検査の合格通知が届くまで、秋雄は優の志願のことを知らなかった。合格通知を目にした秋雄は言葉を失った。秋雄は軍の事務所へ行き、優の志願を取り消してほしいと頭を下げた。そこで秋雄がどんな目に会ったのか。秋雄の顔、背中、足。家に帰ってきた秋雄の体は至る所が腫れあがっていた。そしてその日から、田中家は非国民の烙印を押され、村から孤立した」

SE ノック

看護婦 「田中さん、点滴を交換しますね」

秋雄 「ああ、どうもありがとう」

看護婦 「体調はどうですか」

秋雄 「相変わらずや。良くも悪くもない」

看護婦「ちよつと、袖を上げますね」

秋雄「すまんなあ。こんな患者、気持ち悪いやろ」

看護婦「え？なんでです？」

秋雄「腕も顔もひどい痣だらけやからなあ」

看護婦「そんなこと、私はちつとも気にしません」

秋雄「これでも僕は医者でね。もつとも、こんな痣だら

けの顔をしてるもんやから、患者はほとんど来てくれ

へんかったけどなあ」

看護婦「そうですか」

秋雄「国に逆らったんや。自業自得や」

看護婦「……でも、田中さんのところへ通われる患者さ

んも居られたんでしよう」

秋雄「ああ、ちよつとは居ったなあ」

看護婦「それは、田中さんのお人柄が良いからじゃない

ですか」

秋雄「え？（照れ笑い）あんたはええ看護婦さんやな。

手際はええし、気配りも出来る」

看護婦「有り難うございます。あの、しんどいときはい

つでも言ってくださいね」

秋雄「ああ、そうするわ」